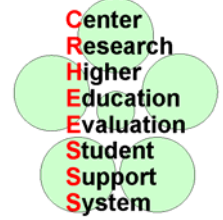


# 週刊センターニュース

No.138



第138号(2006年12月11日) 毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## ○●○ 共同学習会のご案内 ○●○

### 第138回共同学習会

日時: 12月14日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

題目: 『「なんでも相談室」の相談体制を考える』

発表者: 西山宣昭(大学教育開発・支援センター)、三上純子(共通教育機構教務・学生委員長)

趣旨: 「なんでも相談室」は各学部の教員とボランティア学生の皆さんの協力により運営されています。6年目を迎えた現在の相談体制について、一度皆さんのご意見をうかがい、今後活かしてゆきたく思います。

### 第139回共同学習会

日時: 12月21日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

テーマ 特色ある学生支援について—大分大学の経済支援例を中心に—

発表者: 伊藤 幹雄 (学生部学務課学生支援第一係)

趣旨: 法人化以降、国立大学においても、学生への経済支援に工夫を凝らしている例が増えている。今回、地元銀行との協力により新たな経済支援により注目されている、大分大学の例を中心に紹介し、本学における関連の支援のあり方について議論する。なお、これは、伊藤氏を研究協力者の一人とする研究課題名「大学評価指標における学生支援の位置づけに関する実証的研究」(科学研究費補助金基盤(c) 課題番号18611004)の研究結果中間報告の一部をなすものである。

## ○●○ 中国、韓国の高教育改革の動向—桜美林大学国際シンポジウム参加報告 ○●○

12月6日(水)に桜美林大学大学教育研究所で「日中韓の高教育改革」というテーマで、各国の高等教育専門家による報告がなされた。高等教育の改革モデルとして、アメリカを中心に欧米の教育先進国に眼を向けるのが一般的であるが、(東)アジア圏での協力関係が経済活動だけでなく、様々な領域そして多層レベルで強く求められる中、それぞれの教育に対する関心もかつてないほどに増加し、課題共有・情報交換が頻繁になされている。とくに国際競争力の強化を担う高度人材養成において、高等教育システムの再構築は、いずれの国も喫緊・必須の課題である。

韓国の報告(玄京錫氏: 韓瑞大学教授学習センター長)は、韓国の高等教育をとりまく環境と状況、主要な3つの改革について言及がなされた。高等教育進学率80%以上と、普遍化する過程において生じている問題は、①機関(間)の目的、役割定義が不充分②大学生の基礎学力低下③高等教育の多様化の不充分④教育条件の悪化、恒常的な定員割れ⑤労働市場における大卒者需給の不均衡⑥教育内容の実質化の不備による国際競争力の低下などがある。こうした背景にあって、質改善のためにBK21事業、大学評価、NURI事業が進行中である。BK事業は、日本のCOE事業と同じ世界水準の大学育成を目指す政策であるが、学士課程の制度改革等 academic affair に関わる改革課題も含めている所が注目される。ほぼ一サイクルを終えての成果であるが、主に学術活動面でかなり実績が出たとみられている。しかし選定されなかった地方大学・不人気学科との不均衡が拡大するという問題も生じている。BK事業やこれまでのソウル一極集中的な大学政策の欠点を補うために打ち出されたのがNURI事業である。この事業は地方大学の競争力強化を意図し、地域戦略産業の人材養成を狙っている。ただ国立大・理工系偏重で、公平性の観点から不充分であるとの指摘もある。最後に、大学評価であるが、韓国ではすでに94年から機関別認証評価を実施しており、実績を残している。一周期目はスト

ック評価重視、二周期目は保有ストックに基づくパフォーマンス評価に力点を置いたが、そして来年から入る三周期目では大学個性誘導重視の評価を行うことになる。このように段階的に無理なく評価そのものが「進化」していると見ることができる。しかし、評価基準が必ずしも大学教育の質や成果を適切に反映していない部分もあるなど、まだまだ課題も多い。

東北師範大学国際比較教育研究所長の孫啓林氏による中国報告からは、一大学における教学改革の具体的な状況を垣間みることができた。中国の高等教育は、基本的に「専門教育」という固い枠組の教育課程を有しており、大学・学事運営面で自主性に欠ける部分があったと指摘されている。しかし、拠点形成事業としての211工程や985工程などドラスティックな政策が推し進められる過程で、運営面での裁量権が徐々に与えられてきている。東北師範大学では、「広い口径、厚い基礎、優れた専門、多い出口」という人材養成モデルを立てて、情報化社会に対応し、学部教育を重視し、複合的で高度な人材の養成を目指している。そして、そのために、募集・教育・卒業とインプット-スルー-アウトプットの一連の流れを一体化させるようなカリキュラム作り（本科教育課程モデル、三類二層の教員資格課程システム）や組織改編を漸次推し進めているとのことである。学生が受けた大学教育が社会のニーズに合っているかどうかという意味で、日本を含め、三国は同様な背景のもとに、現在の大学（教育）改革が進んでいることが理解できる。

最後に、アジアの高等教育について、来る12月14日-15日、日本私立大学協会附置私学高等教育研究所主催で、国際ワークショップ「東アジアにおける私学高等教育研究のフロンティア」（於 アルカディア市ヶ谷、詳細なプログラムは<http://www.riihe.jp/kokai/ProgramFinalTentativeJ.pdf> 参照）が開催される予定である。ご関心のある方は是非参加していただきたいと思う。

（文責：評価システム研究部門 渡辺 達雄）

## ○●○ 高等学校向け進学説明会講演担当報告 ○●○

12月2日（土）、長野県佐久市にある佐久長聖高等学校において、「進学講話 多様化する学生と大学」と題して講演を担当した。中高一貫の私立学校であり、甲子園出場や男子駅伝で有名であるが、毎年東大に現役合格者を出すなど、長野県屈指の進学校の地位を占めている。学校長より依頼された内容は「大学入学までに身につけておいてほしいさまざまな事柄、大学改革の現状、金沢大学の様子」についてであり、一貫課程1年生と教職員合計100余名を対象に、質疑応答を含めて1時間の講話を行った。高校1年生向けということもあり、事前に本学学生部入試課から送付しておいた本学紹介の資料も引用しながら、本学の学生支援を中心とした教育改革の状況について、全国の大学との比較も試みながら、分かりやすく解説をするよう心掛けた。

当日は併せて、佐久長聖中学校でも、全校生徒330人、保護者200人、教職員20人に対し「文教講演会 変わる若者、変わる大学」の講演も担当した。大学進学を前提とした募集を行っていることもあり、講演後の控え室に生徒が尋ねてくるなど、保護者のみならず生徒も大学の状況に関心を持っていることがうかがえた。

講演終了後、学校内を案内してもらったが、全国的に注目されている学校だけに、さまざまな面で学習への配慮がなされているとの感を強くした。私は法学部教授時代に富山県立魚津高等学校における進学説明会を担当したことがあるが、公立校、私立校それぞれに校風は違うのは当然のことであり、カリキュラムはもとより担当教員さらには、学習環境において様々な背景をもった生徒が受験するわけである。本学進学を勧めるという趣旨での講演担当引き受けであり、数年後に該当高校からの受験生が増えれば、しかも本学の実情を知った上での良質な受験生が増えれば、成果があったということになる。ただし、現時点においても、高校の現状を垣間見ることができたことは、本学への受験を勧めてくれる教員や保護者がどんな思いで高校生を支えているのかを想像することにつながり、意味あることと思われた。それぞれの学部でも本学受験を薦める高校訪問等をされていることと思う。高大連携もさまざまな面から進めていかねばならないが、まずはそうした機会に、高校生そして高校の現状を正確に把握する努力が必要であることを強調しておきたい。

（文責：教育支援システム研究部門 青野 透）